

鹿児島医セン

連携室だより

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

2008.8 No.29

第104回 日本循環器学会九州地方会について

去る6月28日に第104回日本循環器学会九州地方会が、鹿児島医療センター（会長中村一彦先生）主催の下、かごしま県民交流センターにて行われました。この学会は九州の各大学を中心に毎年6月と12月に開かれる学会で、我々循環器に携わる者にとっては若い頃から学会発表の初陣を飾る場所として極めてなじみの深い学会です。私自身、30年前久留米大学の講義室で、並み居る九州の偉い先生方の前で左上肢を水平に上げると発作性上室性頻拍症が誘発されるめずらしい症例を発表したのを鮮明に覚えています。偉い先生方からいろいろと指摘を受けて、帰りの汽車の中で先輩の先生方と酒を飲みながらああだこうだと話しをしながら、当時は5時間ぐらいかかる特急列車で鹿児島に帰って行ったのを思い出します。当時は今のようなスマートな学会場ありませんし（当時はたいてい大学の階段教室が使われていました）、学会を取り仕切るコンベンションもありませんでした。実際は多くの人間を抱える大学にしかできなかったのです。それが、今回なぜか鹿児島医療センターに白羽の矢が立ったのでした。これまで開かれた地方会で、大学以外の病院がこの学会を仕切ったのはわずか2回目で、九州の国立病院機構の病院の中でも初めての経験でした。

この地方会は現在九州各県からおよそ500人が参加する中規模の学会ですが、日本の各地方会の中でも活発に運営されている地方会の一つです。この10年の間、様々な課題を次々に乗り越えてきましたが、数年前からYoung Investigator's Award (YIA)が始まりました。今回は九州の4つの大学と鹿児島医療センターからの合計5題が集まり、応募



以外の施設から大学の教授、准教授7名を審査員として選出しました。9時からYIAセッションは静かに始まり、各施設から5人の俊英が発表をし、審査員からのきびしい質問が繰り返されました。質問に対する応え方も審査の対象となります。YIAでは2人の最優秀賞を決めることになっておりますが、下川原先生の演題と熊本大学からの発表が最優秀賞に選ばれました。大学以外の病院からの発表も初めてでしたが、その受賞も初めてのことでした。小さな学会のYIAセッションとはいえ、長く、そして絶え間ない努力がなければ決して優秀賞に選ばれることはありません。下川原先生、おめでとうございます。そして、それを支えてこられた城ヶ崎先生、瀬戸口先生のご努力にあらためて敬意を表したいと思います。

YIAセッションに始まった学会はその後、4つの会場で行われる一般演題発表と、2つの特別講演、2つのランチョンセミナー、そして午後的一般演題へと順調に進みました。その間、別室では幹事会、評議員会が催されました。すべては予定通りに進みま

したが、この運営には山下副院長始め、第一循環器、第二循環器の先生方、それに秘書の方々など多くの病院関係者の協力がありました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

終わってみれば、550名の参加数のりっぱな地方会でした。この学会の事務を担当したのは私自身2回目でしたが、それでも学会というのはいろいろと気を使うものです。学会の終わった翌々日、それまで全然そのようなそぶりを見せていなかった会

長の中村院長が、「やっぱり疲れた」といっておられました。それを聞いて、あいつ(私のことです)に事務を頼んだが大丈夫かなと、途中ずいぶん心配されていたことがわかりました。

たぶんこれからは、大学以外の主催で行われることも増えてくると思います。その意味で今回の学会を我々の病院が運営できたことは九州にとって大きな意義があったと思っております。

(循環器科部長 皆越 眞一)

下川原先生の演題が「日本循環器学会九州地方会 Young Investigator's Award」の最優秀賞に選ばれました。

急性心筋梗塞における血漿 Vascular Endothelial Growth Factor (VEGF) 値と左室リモデリングとの関連

国立病院機構 鹿児島医療センター 臨床研究部・循環器科

○下川原裕人、城ヶ崎倫久、瀬戸口学、市来智子、菌田正浩、鹿島克郎、中島均、皆超眞一、中村一彦

目的

急性心筋梗塞(AMI)における急性期の血漿 VEGF 濃度と左室のremodelingの関連について検討すること。

方法

発症 12 時間以内に経皮的冠動脈形成術を行い、TIMI grade III の再灌流が得られた AMI 患者を対象とした (n=23, 平均年齢 66.0 ± 2.2 歳, 男/女=14/9)。発症から 7 日目までは 1 日毎に、その後 14 日目、21 日目、28 日目の血漿 VEGF 値を ELISA 法にて測定した。発症から 2 週間後、6 カ月後、2 年後に左室造影で左室拡張末期容積係数 (LVEDVI)、左室収縮末期容積係数 (LVESVI)、左室駆出率 (LVEF) を測定した。

結果

血漿 VEGF 値は発症 6 日目をピークに上昇し、その後漸減した。AMI 発症後 2 週間と 6 ヶ月後の LVEDVI、LVESVI、LVEF の差をそれぞれ Δ EDVI、 Δ ESVI、 Δ EF と定義し、peak VEGF 値との関連を検討したところ、 Δ EDVI、 Δ ESVI とは有意に負の相関 (Δ EDVI; $r = -0.45$, $p = 0.03$, Δ ESVI; $r = -0.68$, $p = 0.0002$)、 Δ EF とは有意に正の相関を認められた (Δ EF; $r = 0.56$, $p = 0.0046$)。また AMI 発症、2 週間と 2 年後の検討ではその関係性がさらに顕著に認められた。 (Δ EDVI; $r = -0.805$, $p = 0.0032$, Δ ESVI; $r = -0.859$, $p = 0.0007$, Δ EF; $r = 0.894$, $p = 0.0001$)

結論

AMI において急性期の血漿 VEGF 濃度は左室拡大の抑制と左心機能の改善に有意な相関を認め、血漿 VEGF 濃度が左室リモデリングに影響を及ぼすことが示唆された。

登録医医療機関紹介 第15回

沖野循環器科病院

鹿児島医療センターの皆様には、平素より循環器科をはじめ様々な診療科の先生方に大変お世話になっています。本当にありがとうございます。

さて当院は、「リハビリテーションのできる循環器専門病院」を目標として、西千石町という鹿児島市の中心地にあり、29床全てが通常より広めに設計された療養病床です。そもそも私(沖野秀紀)が、初めて循環器を本格的に勉強させていただいたのが、当時の国立南九州中央病院でした。その頃、急性心筋梗塞症の患者様に鹿児島で初めて血栓溶解療法を行うなど、急性期に積極的な治療を行い始



めた時期で、県内からたくさんの患者様が集まり、毎日のように病院に泊り込んでいたのを覚えています(嬉しいことにその頃ICUに勤務されていた看護師さんが現在のICU看護師長さんです)。それがきっかけで、30歳の時に小倉記念病院に国内留学をして心臓カテーテル検査やPTCAを学び、その後は鹿児島市立病院に8年間勤務し循環器を中心とした救急医療を経験させていただきました。その頃から、積極的な治療により心臓は良くなっても下肢の筋力が低下し歩けなくなったり、脳血管疾患や整形外科疾患の患者様が循環器病を持っているためにリハビリテーションを受けられない患者様が多くいらっしゃいました。そのような方を受け入れ、安心してリハビリテーションの出来る循環器専門病院をめざして、40歳の時に内科沖野病院に帰りました。平成14年に理学療法室を中心とした病院に新築し、現在では副院長の小畑八郎先生と2名の理学療法士とともに毎日の診療を行っております。入院患者様は、急性心筋梗塞、心不全や心臓血管外科術後の回復期リハビリや、心房細動など心臓病を有する脳血管疾患のリハビリ、慢性呼吸不全に対する呼吸器リハビリなどの方が多く、それぞれの患者様にあったペースでゆっくり時間をかけてリハビリを行い、満足して退院していただけるように心がけています。

(沖野循環器科病院 院長 沖野 秀紀)

診療メモ

「全身麻酔の歴史」

近代西洋医学における全身麻酔の歴史は、意外に新しく1842年クラーク(W.E.Clarke)が、抜歯にエーテルを応用したことに始まります。エーテルが麻酔薬として広く用いられるきっかけをつくった最大の功労者はモートン(W.T.G.Morton)であり、彼は1846年マサチューセッツ総合病院で、下顎血管腫切除の麻酔の公開実験に成功しました。その偉業を称えて、公開実験が行われた部屋が、現在もハーバード大学のエーテルドームとして残されています。実は日本における全身麻酔の歴史は、それよりも早く1804年 華岡青洲がチョウセンアサガオから通仙散を調合し、乳癌の摘出術に成功しました。しかし特殊な技術は秘伝・口伝という日本の風習のため、この功績は世界的にはもちろんのこと国内でもあまり知られていません。その後の麻酔の発達は気管内挿管やベンチレーター、分離肺換気法、開頭術、人工心肺など麻酔技術や手術手技の目覚ましい進歩とともに歩んできました。しかしその一方で麻酔の歴史は薬物の副作用、機械の未発達性、医療従事者の未熟性、術後合併症の克服困難性などによる偶発事故や医療事故との戦いでもありました。最近では、科学の発達による医療レベルの向上、マイクロエレクトロニクスの進歩に伴う有用な麻酔監視モニターの普及、麻酔専門医の増加などにより麻酔の安全性は飛躍的に向上しています。

(麻酔科医長 原口正光)

看護学校 第15回学校祭

平成20年6月27日(金)、28日(土)の2日間にわたり学校祭をおこないました。今年は「夢」というテーマのもと、学生385名が一丸となって学校祭に取り組みました。1日目の27日は、みやまコンセールの指導監督員の瀬戸口先生の指導のもと、学生が2ヶ月間にわたって練習してきました合唱です。合唱曲は、「カントリーロード」「ベストフレンド」「明日への扉」の3曲です。フロアーの皆さんも一緒に夢の実現に向けて、また大切な人への思いをこめて大合唱となりました。そして、みやまコンセールの瀬戸口浩先生の独唱は、胸にしみこむ歌声で観客は大変感動しておりました。

午後からは講演会を開催しました。演題は「夢はきっと実現する」です。講師は「元気になる魔法の口ぐせ」が全国的なベストセラーになり現在、作家・教育コンサルタントとして活躍されています中井俊己先生です。先生の講演をきき、夢を叶えるためには必ず成功する方法があることを知り、自分の夢の実現にむけての励みになったと思います。また看護



師をめざしている学生にとっては、自分の夢を叶えるだけでなく、傷ついた人、挫折した人、病む人の夢を応援できる人になると改めて考える機会となったようです。

また、学生・学校職員全員の「自分の夢」の展示や、看護師・保健師・助産師などの看護職として現在活躍されている方のメッセージを通して、自分の未来の扉を開くことができたようでした。

2日目の28日は、57名の高校生に一日看護学生体験をおこないました。看護学校を紹介し、高校生が看護学生とともにフィジカルアセスメントなどの看護技術を体験することで、看護学校への興味や関心が高まっていました。看護学生の高校生への自信をもった対応に成長を感じました。

今後は、自分の夢をさらに膨らませ夢に向かって邁進していけるように学生を支援していきたいと思えます。
看護学校 教育主事 朝月 真由美



お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号
 (代)TEL 099 (223) 1151 FAX 099 (226) 9246
<http://www.kagomc.jp>
 脳卒中ホットライン ▶▶ 090-3327-5765

(地域医療連携室) 濱田、大渡、平田、中島、田添、吉留、善福
 直通電話 ▶▶ 099-223-4425
 フリーダイヤル専用FAX ▶▶ 0120-334-476
 ※休日・時間外は当直者で対応します。

